

古山陰道の遺構考証

— 南山城地域の遺跡から —

村田和弘

1. 考古学と“道路”

近年各地において古代の官道が発掘調査によって発見されている。従来、古代の官道・古道の研究は歴史地理や文献などの分野を主としておこなわれてきた。考古学において、道路遺構の認識が高まったのは最近のことである。

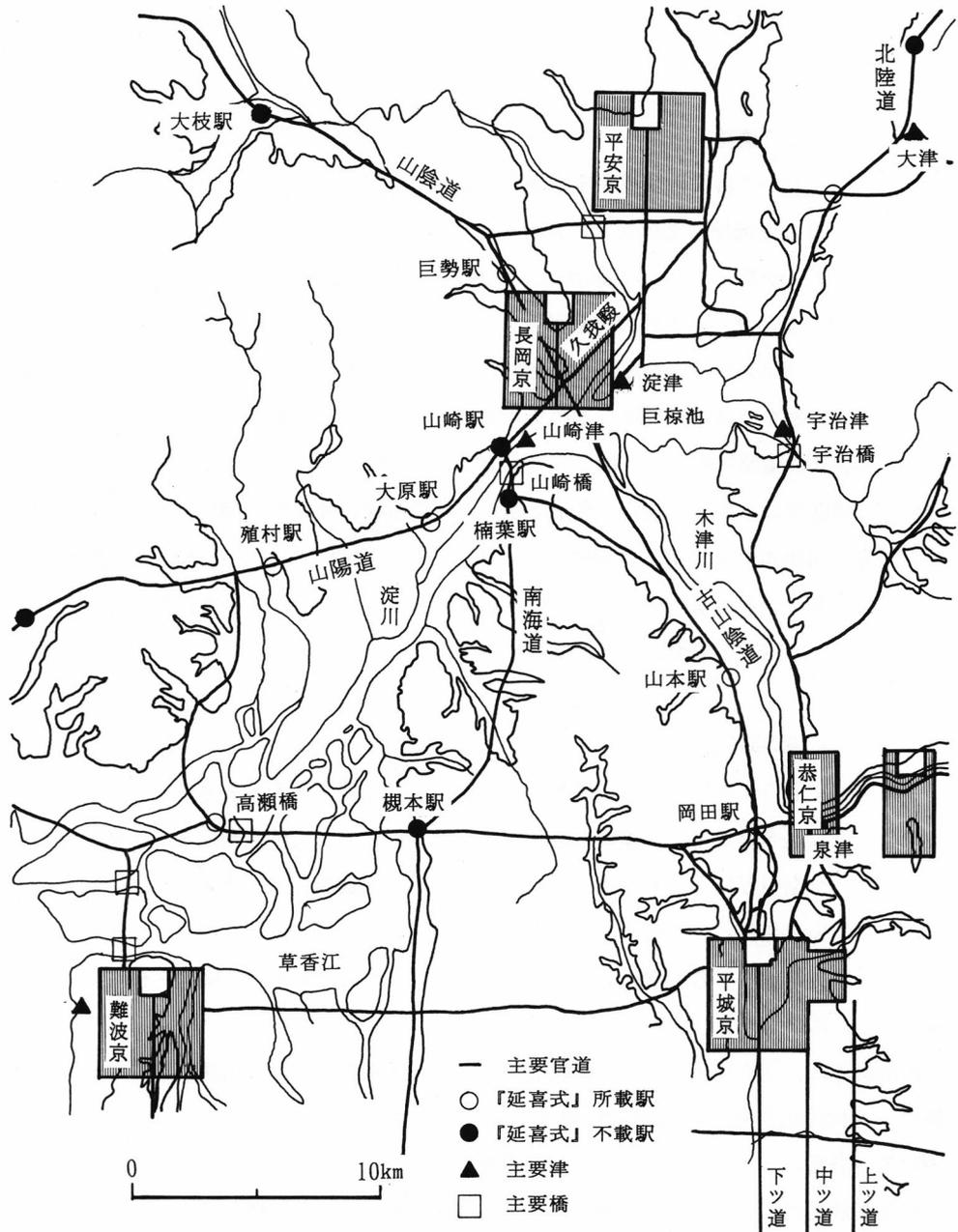
歴史地理の分野からの古代の道路研究は、「七道駅路」を中心としてルートの復原、駅家の位置などの研究で多大な成果を挙げている。しかしながら、考古学による古代の道路の研究は、最近までは主に都城などの条坊道路を中心に発掘調査をおこなってきた。考古学による古代の道路の検出を目的とした調査は、80年代後半になってようやくおこなわれ始めた。現在では、都城に限らず各地において道路遺構の検出例が報告されている。そのなかでも、山陽道や東山道・西海道においては、考古学的にルートの確認や道路の規模、ルートの変遷、駅家遺構の検出などの成果が挙げられている。近年の古代の道路の研究は、歴史地理学・考古学の両面からみた検討がおこなわれている。

2. 古山陰道の研究

古山陰道に限らず古代の道路の研究は、歴史地理学と考古学の調査方法からおこなわれることは既に述べた。古代の道路の調査方法には主として、文献の利用・小字名からの検討・古地図や空中写真からの判読・現地での踏査・発掘調査による遺構の検出・関連遺構との検討・周辺遺跡との関連についてなどの方法があげられる。現在の古代の道路の研究は、主に歴史地理学と考古学の2つの分野からおこなわれ、対をなす調査・研究方法と認識されている。

古山陰道は、奈良時代から平安時代前半までの平城京から山陰・山陽につながる幹線道路で、古代の山陰道・山陽道の併用道であったと考えられている。古山陰道の研究は、1972年の洛西ニュータウン建設に伴った調査が契機と言える。このときの調査に携わっていた足利健亮氏によって研究が進められ、“古山陰道”という名称でひろく知られることになる。古山陰道のルートは、1985年に足利氏によって推定され、古山陰道は、平城京か

ら発し奈良山を越え、東を木津川、西を京阪奈丘陵からのびた丘陵の裾を通り、木津川を渡り小畑川付近を通り、老ノ坂峠を越えて丹波に抜けるといったルートであると、足利氏は残存する道路痕跡と歴史地理学的調査の成果から推定をおこなった。そして、残存する



第1図 古代交通路(足利案に一部加筆)

道路痕跡から古山陰道は直線的なルートであったと推定した(第1図)。

古山陰道は、歴史地理学的な調査・研究は進められてはいるが、実際に発掘調査によって道路遺構を確認しておらず、道路に関連する遺跡・遺構の検出例も少なくデータ不足といえる。歴史地理学からの研究でルートの推定は進められても、ルートの確定をする考古資料が少なすぎるとというのが現状である。古山陰道の考古学的データが不足している理由として、第一に長岡京遷都や条里区割などの後世による造成や削平によって失われ検出できないこと。第二として、道路や駅家などの存在を想定した計画的な調査をしている例が少ないことなどがあげられ、現段階において古山陰道のルートを確定することは困難である。

3. 古山陰道と遺跡

古山陰道の推定ルートは、足利氏の研究による推定ルートがひろく知られている。以前に筆者もルートの推定をおこなったが、足利氏の推定ルートとして大きく変わる結論は出せなかった。本稿は、古山陰道が通ると考えられている沿線に位置する2つの遺跡について、古山陰道との関係について考え、制度や時期による古山陰道のルートの変更や機能や性格の変化について検討をおこなう。

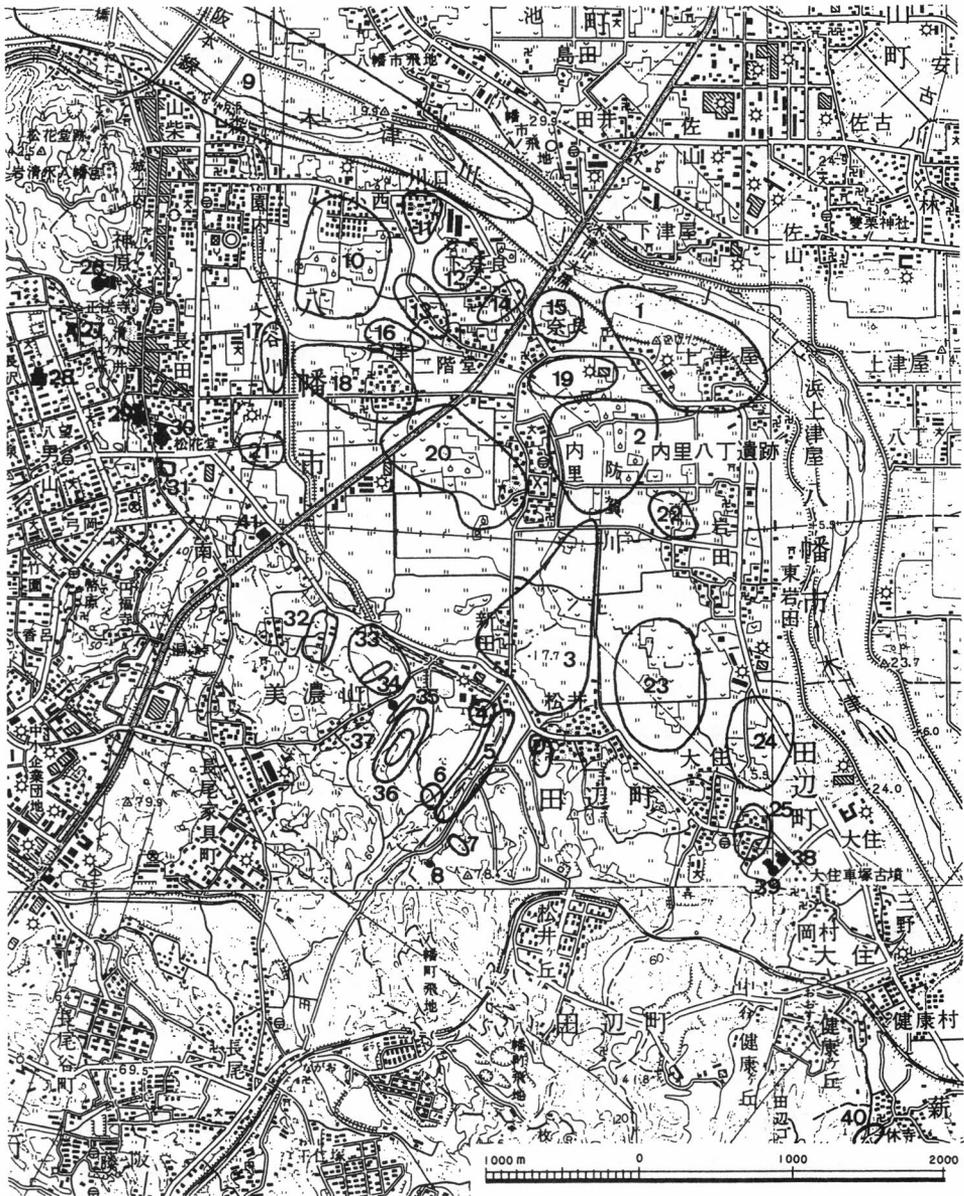
古山陰道のルートを推定する方法は、先にも述べたとおり地図や航空写真から地形や地割から道路痕跡などを読み取り、駅家と駅家とを結ぶ、または都城・官衙までの道路を最短距離で直線的なルートとして推定するのが従来の方法である。

しかし、ある地域において従来の推定されたルート以外に、何本か別のルートが考えられる道路が存在する。古代の官道が最短距離で直線的なルートという定義を否定はしないが、1本のルートを古山陰道のルートとするのか、または、時期によってその他のルートを使用していたのかを考え、地形の制約や周辺の集落遺跡との関係などから古山陰道ルートを検討しなければならないと考える。

本稿において著者は、古山陰道が通過するといわれている地域を対象として、従来の推定ルートとの相違点と時期によるルートの変更・変遷の可能性について、発掘調査がおこなわれている遺跡とその周辺の歴史地理的環境を含めて検討をおこないたい。ここでは、当センターが発掘調査をおこなった南山城地域の2つの遺跡、内里八丁遺跡と興戸遺跡を対象遺跡として、遺跡周辺における古山陰道について考えたい。

①古山陰道と内里八丁遺跡

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里小字八丁・日向堂に所在する。この遺跡は、木津川左岸沖積地に存在する埋没自然堤防上に営まれた、弥生時代後期末～飛鳥・奈良時代(一部に鎌倉時代を含む)の複合遺跡であることがこれまでの調査で明らかになっている。周



第2図 内里八丁遺跡位置図

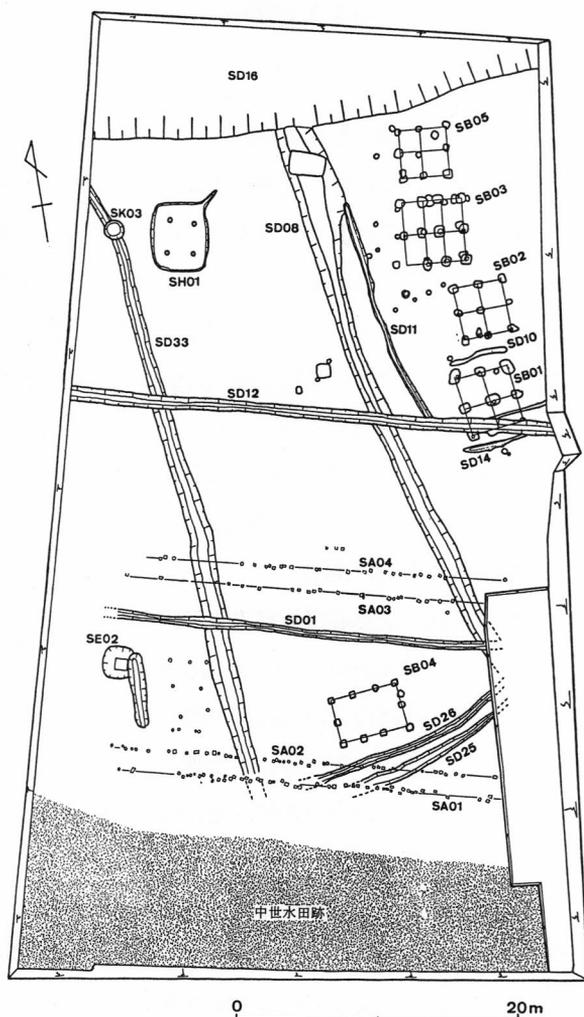
- | | | | | |
|------------|---------------|------------|------------|------------|
| 1. 上津屋遺跡 | 2. 内里八丁遺跡 | 3. 新田遺跡 | 4. 女谷横穴群 | 5. 荒坂横穴群 |
| 6. 荒坂遺跡 | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 松井古墳状隆起 | 9. 木津川河床遺跡 | 10. 河口扇遺跡 |
| 11. 川口環濠集落 | 12. 下奈良遺跡 | 13. 今里遺跡 | 14. 出垣内遺跡 | 15. 上奈良北遺跡 |
| 16. 奥戸津遺跡 | 17. 舞台遺跡 | 18. 戸津遺跡 | 19. 上奈良遺跡 | 20. 内里五丁遺跡 |
| 21. 一ノ坪遺跡 | 22. 西岩田遺跡 | 23. 魚田遺跡 | 24. 散布地 | 25. 東林遺跡 |
| 26. 石不動古墳 | 27. 式部谷遺跡 | 28. 茶臼山古墳 | 29. 西車塚古墳 | 30. 東車塚古墳 |
| 31. 志水廃寺 | 32. 金衛門垣内遺跡 | 33. 狐谷遺跡 | 34. 狐谷横穴群 | 38. 大住車塚古墳 |
| 35. 美濃山横穴群 | 36. 美濃山廃寺下層遺跡 | 37. 美濃山廃寺 | | |
| 39. 大住南塚古墳 | 40. 堀切横穴群 | 41. ヒル塚古墳 | | |

辺には古墳時代中期の竪穴式住居跡を検出した新田遺跡などがある。また、この遺跡の東方には上奈良・下奈良という地名があり、地名から平安時代の文献『延喜式』に記載されている古代の天皇家直轄の菜園であった「奈良園」との関連などが指摘されることや、内里八丁遺跡の付近を古山陰道が通ることが想定されていることで立地上注目される遺跡である(第2図)。

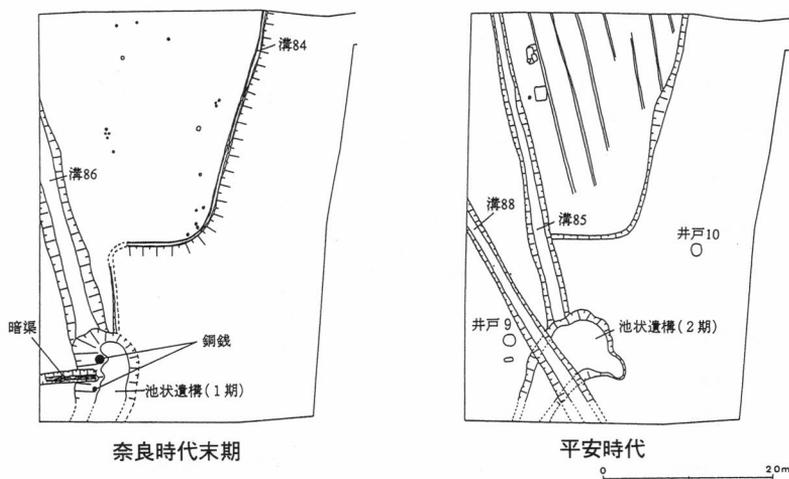
内里八丁遺跡の周辺は、足利説でも道路痕跡が確認されず、北方の道路痕跡と南方の道路痕跡をつないで古山陰道のルート进行を想定した、いわゆる空白地帯であり、地図からの古山陰道の復原には限界があるといえる。そこで、昭和63年度から始められた発掘調査による成果から古山陰道のルートについて検討したい。

注目すべき遺構は、A地区の飛鳥時代～奈良時代の遺構面で検出されたSD08・SD33で、この2本の素堀り溝は、足利説の道路方向と同様の方位を持っていることである。そして、東側の建物群もほぼ同様の方位で規則性を持っていること、この遺構面に建物群の時期が二時期あることも興味深い。しかし、北側と南側で溝が途切れることやこの溝が区画溝である可能性も捨てきれないので、この溝が道路側溝であり、2本の溝の間が古山陰道の路面であるとは断定することはできないが、さらに南北での調査で溝の延長が検出されれば、可能性は高くなると考える(第3図)。

もう1つ注目する遺構は、D1地区の奈良時代末と平安時代前期の遺構面で検出された。それは、奈良時代末とされるSD



第3図 A地区飛鳥～奈良時代遺構図(参考文献4より)



第4図 D1地区遺構図(参考文献5より)

86と池状遺構(1期)と暗渠施設。さらに、平安時代前期のSD85・池状遺構(2期)である。SD86は、奈良時代末の遺物が多量に出土した素堀り溝でN12°Wの方位を持つ。さらに、南にある池状遺構に直交するように設置された暗渠施設は、上を何かが通ることを意識し設置されたと考えられる。また、平安時代前期の遺構SD85も位置は違うがSD86と同一の方位を持っている。この方位は、足利氏が復原している古山陰道の方位(約N26°W)とは異なるが、二時期にわたる同一方位を持つ溝、暗渠施設の設置から、SD86の西側、または、SD85の西側を道路面と考え、二時期の路面を持つと考えることができる。しかし、この2本の溝を古山陰道、または道路遺構の東側溝と確定するには、西側溝となる溝の検出を待たなければならない(第4図)。

②古山陰道と興戸遺跡

興戸遺跡は、京都府綴喜郡田辺町字興戸小字犬伏に所在する。田辺町は木津川の左岸に位置し、西部は京阪奈丘陵、東部は木津川によって形成された沖積地で構成されている。そして、興戸遺跡は京阪奈丘陵の裾から張り出した台地上と沖積地に展開している。興戸遺跡は、弥生時代～平安時代の遺構を持つ南山城でも有数の複合遺跡である(第5図)。

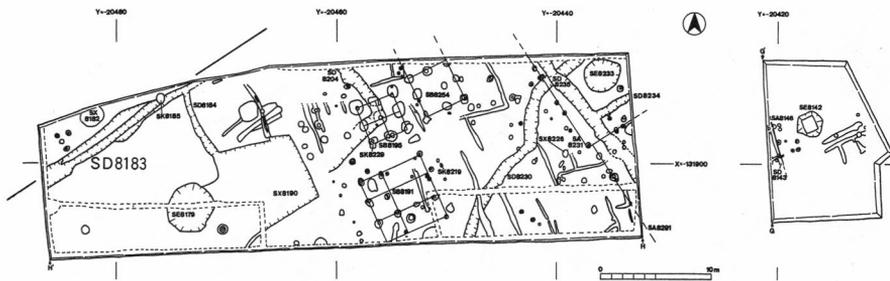
現在、台地上には府道木津八幡線(22号線)が通っており、それを境にして東部は一段低くなり耕作地帯となっており、東方に行くに従って徐々に下っていく。西部と東部では地形的に相違があり、遺跡の立地に関して影響を与えていると考えられる。また、現府道木津八幡線の該当地帯は、古山陰道と同一路線であるといわれており、古山陰道によって遺跡の立地に影響を受けている可能性もある。

興戸遺跡は、主に西部側が調査され、特に奈良時代直前から平安時代前期までの遺構面

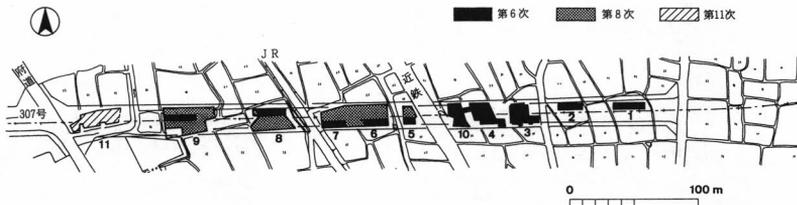


第5図 興戸遺跡位置図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 興戸遺跡 | 2. 薪遺跡 | 3. 西浜遺跡 | 4. 伝道林遺跡 | 5. 稲葉遺跡 |
| 6. 青上遺跡 | 7. 東神屋遺跡 | 8. 棚倉遺跡 | 9. 天理山古墳群 | 10. 小欠古墳群 |
| 11. ニヶ池遺跡 | 12. 河原遺跡 | 13. 鍵田遺跡 | 14. 五反田遺跡 | 15. 橋折遺跡 |
| 16. 宮ノ後遺跡 | 17. 南垣内遺跡 | 18. 下ノ河原遺跡 | 19. 竹ノ脇遺跡 | 20. 田辺遺跡 |
| 21. 田辺城跡 | 22. 稲葉丹後谷遺跡 | 23. 大谷古墳 | 24. 興戸宮ノ前窯跡 | 25. 川原谷遺跡 |
| 26. 興戸宮ノ前遺跡 | 27. 興戸城跡 | 28. 天神山遺跡 | 29. 野神遺跡 | 30. 飯岡遺跡 |
| 31. 草路城跡 | 32. 田中遺跡 | 33. 七瀬川遺跡 | 34. 散布地 | 35. 都谷遺跡 |
| 36. 新宗谷窯跡 | 37. 新宗谷古墳 | 38. マムシ谷窯跡 | 39. 下司古墳群 | 40. 散布地 |
| 41. 館跡 | 42. 散布地 | 43. 新宗谷遺跡 | 44. 直田遺跡 | 45. 酒壺古墳 |
| 46. 興戸古墳群 | 47. 郡塚古墳 | 48. 興戸廃寺 | 49. 古屋敷遺跡 | |



第6図 興戸遺跡第6-7トレンチ(参考文献8より)



第7図 興戸遺跡トレンチ配置図(参考文献9より)

において、古山陰道を研究する上で興味深いことがわかった。建物跡や柵・溝が大きく西偏していることが判明した。正確には $N33^{\circ}W$ である。この方位が現府道と同一線であったとする古山陰道と合致するのである。足利氏の説のとおり古山陰道が当時ここを通っていたとするならば、古山陰道の周辺は、建物などの方位が同じ方向で規制されていたことも考えられる。伊野近富氏は、この発掘成果と府道の方位から当時の尺度で1町復原線を引き、1町(300大尺)ごとの条里区画を復原した。しかし、直交線(SD8183)については第6-7トレンチの1か所しか確認されおらず、さらにこの線に交差する $N33^{\circ}W$ の方向線上には同一方向の区画の溝や柵が検出されていないので、必ずしも1町の区画とは考えられない。しかしながら、現府道(古山陰道)の方位と同一方向の建物群、柵、区画溝が検出されたことは、これからの研究に新たな資料を与えたといえる(第6・7図)。

また、興戸遺跡の南東3kmの地点周辺は、田辺町字三山木にあたり今でも「山本」という地名が残っており、古代の駅「山本駅」に比定されている。「山本駅」という駅名は、平城京へ遷都した翌年の和銅4(711)年正月に「始て都亭を置く、山背国相楽郡岡田駅、綴喜郡山本駅、河内国交野郡楠葉駅、(以下省略)」(『続日本紀』)という記述に登場し、都からの幹線道路の各所に駅を置くことが決められた。「山本駅」の所在地は現在のところ確定していないが、古山陰道のルートと大きく関わってくる。東薪から三山木までは現府道も一直線に通っており、古山陰道沿いの集落には興戸遺跡と同様に同一の方位を持つ建物や区画するものが存在する可能性も考えられる。

興戸遺跡の古代の景観は、奈良時代から平安時代前半までの古山陰道(古代山陰・山陽

併用道)沿いは、西側の台地上に官衛的な施設があり、東側には方位を規制された建物群が建ち並ぶ集落が存在し、そして、長岡京遷都を契機に閑散とした景観に変化していき、耕作地化していったと発掘調査の成果から想定できる。それは、平城京期の古代山陰・山陽併用道という主幹道路から、長岡京を経て平安京遷都に伴う一般道への機能・性格の変更がなされたという考えに一致するものである。

4. まとめ

①古山陰道と駅馬・伝馬制

古山陰道が幹線道路(要路)であった時期、国家にとって政治的に最も重要であった地方支配のため、交通路の整備が進められ、中央と地方との国司の赴任・帰任、公使の往来、中央からの政令の伝達、地方からの行政上の報告・連絡、調・庸・雑物の中央への輸送などの大動脈として機能していた。そして、各幹線道路には駅(駅家)が置かれ、管理していた。また、古山陰道は山陰・山陽の併用道であり、他の幹線道路比べると特殊な道路であったと考えられる。

駅馬・伝馬制(以下、駅伝制)に関連する語が文献に登場する。大化前代に、「駅使」(『崇神紀』～『推古紀』)、「駅馬」(『欽明紀』『皇極紀』)、「馳駅」(『皇極紀』)などの語が散見する。しかし、これらは、駅伝制の成立後によるものであって、大化前代に制度が導入されていたとは考えがたいとされている。ただ、大化前代でも、馬による官吏・使者が時に臨んでおこなわれたことは容易に考えられる。特に筑紫大宰(大宰府の前身)が外交・海防の重要な役所であったので、官吏・使者の往来、政令の伝達、大宰からの報告、外国使節の対応と貢物の輸送、渡来人の来日などのために、大和と筑紫との古代の山陽道などは早くから開かれ整備されていたと考えられる。そして、駅伝制のもとでも、山陽道が大路とされたと考えられる。

大化二(646)年正月の「改新の詔」の其の二に曰くの条に「初めて京師をつくり、畿内国司、郡司、関塞、斥候、防人、駅馬伝馬を置け。及び鈴契を造り、(中略)。凡そ駅馬伝馬を給するは皆鈴伝の符剋の数に依れ。凡そ諸国及び関には鈴契を給せ」(『孝徳紀』)とある。改新の詔の文が、浄御原令もしくは大宝令の条文によって修飾された部分が多いことは定説になっており、改新の詔では、駅伝制の導入の方針が示されただけで、制度として実施されたのは大宝令以後であるとするのが定説とされている。制度として確立する前から、古山陰道は主要な道路として機能していたと考えられる。

駅(駅家)は、各幹線道路に置かれ、国衙と国衙を結び、また、七道からそれる国衙への支道に置かれる。道路は、駅使往来の重要度と頻度に応じて、大路・中路・小路にランク

付けされた。山陽道及びそれにつづく大宰府までを大路、東海道・東山道を中路、それ以外の北陸道・山陰道・南海道・西海道を小路とした。

駅は原則として30里ごとに置かれた。当時の1里は、533mにあたり、30里は約16kmである。そのことから、古山陰道のルートが30里ごとに区切っていくと、「山本駅」の所在を推定することはできるが、出発点の平城京からのルートが何通りか想定され、それによって山本駅の位置がずれてくると考えられる。

最近の発掘調査では、歴史地理学や文献を参考として山陽道の駅家である京都府乙訓郡大山崎町の「山崎駅」と兵庫県龍野市の「布勢駅」は、山陽道と建物、施設の構造、道路構造などの古代の道路の研究や、駅(駅家)の研究に必要な大きな成果をあげている。そして、古代の道路や駅は、各地において、発掘調査によって遺構が検出され、古代の交通路の実態がみえはじめている。

②考古学調査による成果

2つの遺跡から検出されたこれらの遺構は、これまでの足利説に当てはまるもの、または説とは異なる成果が得られた。内里八丁遺跡では、A地区で検出されたこれまでの説と同様の方位を持つ2本の溝と規則性を持つ建物群、また、D1地区で検出されたこれまでの説とは異なる方位の二時期の溝と暗渠施設。興戸遺跡では、現府道(古山陰道)と同様の方位を持つ建物群や溝・柵の検出、古山陰道の機能・性格の変更の時期と興戸遺跡の変遷との一致という成果があげられた。

この2つの遺跡は、南山城でも有数の複合遺跡で知られており、規模や特殊な遺物の出土などから一般的な集落とは区別される公的な施設や公的な規制を持つ集落であると考えられる。当時の幹線道路であったとする古山陰道が、これらの遺跡の付近を通っていたことも想像される。そして、「山本駅」との関連や条里区画の可能性なども非常に興味深いところである。

③まとめ

今回、古山陰道のルート沿いに存在する内里八丁遺跡と興戸遺跡の2つの遺跡内で、道路遺構やそれに関連すると思われる遺構について考えてみた。2つの遺跡は、ルート沿いの遺跡でも広く調査され様相が知られている遺跡で、建物の方向性や出土品から特殊性を持つ遺跡であると考えられ、古山陰道と関連を持った官衙的な性格を持った集落であったと思われる。

古山陰道のルートの確定は、古代の道路の解明だけにとどまらず、駅(駅家)の位置の想定、そして、道路でつながれた駅や集落との関係の解明、そして、周辺地域を含めた古代の景観の復原にもつながる。古代の道路の研究は、これからの考古学の中で大きな役割を

担っていくと思われる。それだけに、道路遺構の検出を想定した発掘調査について考えていかなければならない。

(むらた・かずひろ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

参考文献

1. 「内里八丁遺跡」 京都府埋蔵文化財情報 第38号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
2. 「内里八丁遺跡」 京都府埋蔵文化財情報 第47号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
3. 「内里八丁遺跡」 京都府埋蔵文化財情報 第52号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
4. 「内里八丁遺跡」 京都府遺跡調査概報 第41冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
5. 「内里八丁遺跡」 京都府遺跡調査概報 第56冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
6. 「興戸遺跡」 京都府埋蔵文化財情報 第39号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
7. 「興戸遺跡」 京都府埋蔵文化財情報 第43号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
8. 「興戸遺跡」 京都府遺跡調査概報 第42冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
9. 「興戸遺跡」 京都府遺跡調査概報 第47冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
10. 「興戸遺跡」 田辺町埋蔵文化財調査報告書 第15集 田辺町教育委員会
11. 「山背国古山陰道小考」 村田和弘 『文化財学論集』文化財学論集刊行会
12. 『古代日本の交通路Ⅰ・Ⅲ』 藤岡謙二郎 大明堂
13. 『日本古代地理研究』 足利健亮 大明堂
14. 『日本交通史』 児玉幸多 吉川弘文館

